

2012 年度 卒業研究

主査 浦野 正樹 先生

題目

山と海に囲まれた暮らし

文化構想学部 社会構築論系

学籍番号 1T090669-3

氏名 豊田 みなみ

目次

序章

- (1) きっかけ
- (2) 目的

第1章 唐桑町の風土

- 1-1 地理・人口
- 1-2 風土的特徴
- 1-3 風光明媚な風景～遊歩道を歩く～

第2章 半農半漁の生活

- 2-1 半農半漁
- 2-2 一年の行事

第3章 山と共に生きる

- 3-1 山と信仰
- 3-2 唐桑町での山菜取り体験

第4章 海と共に生きる

- 4-1 海と信仰
- 4-2 漁師さんからの聞き取り

終章

山と海に囲まれた暮らし

引用文献

参考文献

あとがき

唐桑町との出会い～ボランティアとしての記憶

序章

この論文では、山と海と共に生きる生活について、フィールドワーク地として宮城県気仙沼市唐桑町を例に挙げながら、書き記していく。序章では、山と海と共に生きる生活について興味を持ったきっかけと、調査の目的について示す。

(1) きっかけ

きっかけは「東日本大震災」である。「東日本大震災」は、2011年（平成23年）3月11日14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmの海底を震源として発生した東北地方太平洋沖地震を起点とした震災だ。日本における観測史上最大の規模、マグニチュード9.0を記録した。最大震度は7で、震源域は岩手県沖から茨城県沖までの南北約500km、東西約200kmの広範囲に及んだ。この地震により、場所によっては波高10m以上、最大遡上高40.1mにも上る大津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部にかけて、死者1万5872人、行方不明者2769人、避難・転居者32万6873人（2012年10月31日現在、警察庁まとめ）という甚大な被害をもたらした。

しかし、皮肉なことに、この震災をきっかけとして、私はある一つの地域の存在を知ることとなった。宮城県気仙沼市唐桑町だ。海側に位置する唐桑町も、震災により死者数103人・行方不明者数2人・仮設入居者は平成24年10月22日現在で269世帯769人の被害を受けた。（ちなみに、2011年11月末に調べたときは280世帯826人であった。僅かにではあるが、新しい住居を作り徐々に仮設を出て行っているようだ。）私は、FIWC（※）というNGO団体を通じて、2011年4月5日～5月6日、5月28日～6月7日、6月27日～7月14日、8月1日～8月18日、8月27日～9月2日、9月9日～9月20日の累計・約3か月間、唐桑町にてボランティア活動に従事した。震災復旧支援のボランティア活動をきっかけに出会った唐桑町で、わずかながらでも触れたその文化や生活は、それまでの21年間首都圏（神奈川県）で暮らしていた私にとって、とても新鮮で憧れるものであった。例えば、「道を歩けば知り合いにあたる」ような人間関係の近さや、ひいおじいちゃん・おばあちゃん世代から孫世代まで4代に渡っての共同生活、畑を耕したり山菜を採る暮らし、そして海をいつも肌で感じながら生きること、そのどれもが初めての体験だった。いったい唐桑の暮らしの何に私はそんなに魅力を感じるのだろうか。その大きな要因の一つに、山と海に囲まれ、それと共に生きる暮らしがあると考えた。そして、海と山は日本人の日々の暮らしを支える基盤でもある。この恵みがあるからこそ生きていける。そのことを、東日本大震災をきっかけに出会った唐桑町において意識するようになった。

※ FIWC (Friends International Work Camp)・・・

社会問題に対して、ワークキャンプという形で現地に入り込み解決の糸口を見つけ出す

活動をする NGO。現在は、海外のハンセン病隔離村や貧困村、国内の牧場・農村等で活動している。

◇FIWC と唐桑のつながり…

ハンセン病快復者の宿泊拒否が相次いだ 1960 年代、FIWC はハンセン病快復者のための宿泊施設「交流の家（むすびのいえ）」を奈良市に建設した。その当時、岡山県の国立ハンセン病療養所愛生園から多くの快復者の方々を引き連れ、共に建設キャンプをしたのが唐桑町出身の鈴木重雄氏だった。重雄氏はその後唐桑町に戻り、1973 年当時にハンセン病快復者であることを公表して、町長選挙に出馬。FIWC も選挙活動に応援に駆け付けた。結果は僅差で敗戦。その後、重雄氏は社会福祉法人洗心会を立ち上げ、知的障がい者施設を運営し、唐桑の地域福祉に多に活躍。鈴木重雄氏が亡くなった今でも、洗心会の常務理事である馬場康彦氏と FIWC のつながりは続き、この度そのつながりのもと、FIWC が唐桑の復興支援に入った。

◇故・鈴木重雄氏について…

鈴木重雄氏は、東京商科大（現 一橋大）の学生だった昭和 10 年にハンセン病の宣告を受ける。

故郷には外国に亡命するという内容の手紙を送り、自殺のための放浪の旅に出るが死にきれず、愛生園に入園。園内では偽名の「田中文雄」として 30 年を過ごす。

氏は在園当時から故郷唐桑の発展のために活動し、国立公園編入、国民宿舎の誘致などでは、愛生園在園時に自治会活動のリーダーとして培った厚生省の人脈などのパイプも生かして、蔭ながらたいへんな貢献をした。

また、鈴木重雄氏は、FIWC 関西委員会が活動していた「交流（むすび）の家」を建設するワークキャンプに、岡山のハンセン病療養所・長島愛生園からリーダーとしてたくさんの方々の在園者を引き連れて参加していた。時には、キャンパーとともに、大手企業に勤める大学時代の友人を訪ねて多くの建設資材の協力要請をしたり、FIWC キャラバン隊のトラックで全国を駆け巡り、各地で建設資金カンパとハンセン病の正しい理解を訴えてきた。

社会復帰したあとには地元の唐桑町長選挙に町民の熱い要請をうけて立候補。結果は惜しくも破れたが、「らい快復者」として選挙を闘ったことは日本のハンセン病患者の歴史においても特筆すべきことであった。

「洗心会」は選挙の後に鈴木氏が設立した社会福祉法人で、唐桑や気仙沼で知的障害者入所施設「高松園」「第二高松園」、通所施設「夢の森」ほかいくつもの施設を運営している。

(2) 目的

果たして「山と海と共に生きる生活」とは何なのか。近代化された都市で人々は経験することもなく忘れ去ってしまっている、かつて都市においても存在し、今でも特定の地域において存在するその生活の一部を、未だ伝統的習俗や地縁社会の残る唐桑町をフィールドとして探り、発見していくことを目的とする。

第1章 唐桑町の風土

1-1 地理・人口

唐桑町は、宮城県の北東端にあるリアス式海岸に囲まれた半島にある町だ。岩手県陸前高田市と隣接している。2006年4月1日に気仙沼市に吸収合併された。住民基本台帳人口は、平成24年11月1日現在で、7,091名（男3,483名、女3,608名、世帯数2323世帯）である。（ちなみに平成24年3月末日に調べたときは7,184人／男3,528人、女3,656人であった。半年で約100名減っている。）1976年（昭和51年）に国道45号線と唐桑半島を結ぶ、宮城県道26号気仙沼唐桑線が開通するまでは、“陸の孤島”と言われた程で、以前は気仙沼市街から唐桑半島まで船を出して渡っていた。

主な産業は漁業で、遠洋マグロ漁業で栄えた町だった。漁業で栄えていた頃に建てられた「唐桑御殿（※1）」と呼ばれる立派な家々が、唐桑の景観に彩りを加える。しかし、2011年3月11日の津波でその多くが倒壊した。

また、明治・昭和の大津波（※2）の経験もある町で、道路の所々に「津波に用心」という看板がある。祖父・祖母から孫へ「津波が来たら高台へ。津波てんでんこ（※3）」と口伝により伝えていたという（※4）。しかし、この度の「想定外」の津波で多くの方が亡くなった（※5）。

大きな地域課題として、過疎化と人口減少が震災前から課題とされてきた。現在唐桑町にある小学校は3つ・中学校は2つで、学年生徒数の年々の減少と高校生以上の若者の都市部への流出が進んでいる。

その他、唐桑は主に12地区（北から、大沢地区、舘地区、只越地区、石浜地区、舞根地区、宿地区、鮪立地区、中地区、小鯖地区、中井地区、松圃地区、崎浜地区）に分かれており、地区で各々独立して祭り等の地域行事を開催し、自治会を形成していた。

※1 唐桑御殿

<http://www.rias.miyagi-fsci.or.jp/kk/mind/goten.html> より引用)

「遠洋マグロ漁は1航海が約10ヵ月。漁師たちは、つぎの航海まで疲れたからだを休め短い家族だんらんを久しぶりに楽しみます。そうしたひとときを受け止めてくれるのが【唐桑御殿】。漁師たちは、自分に贈る最高の勲章として、競い合うように豪壮な家を建ててきました。今ではその数200軒を超え町内いたる所で目に付きます。赤瓦、黒瓦を乗せた勇壮な家々は、大きさ、形、坪単価のいずれも他を圧倒し海の生活と共に唐桑ならではの景観を形づくっています。」



唐桑御殿(72坪の平屋)どっしりとした構え、見る者を圧倒する。



唐桑御殿は(入母屋)が特徴だ。建築には屋根の反りが最も難しいと言われている。

※2 明治・昭和の大津波…

1896年(明治29年)と1933年(昭和8年)に三陸地方で発生した地震に伴う大津波のこと。

◇明治三陸地震…

1896年(明治29年)6月15日午後7時32分30秒、岩手県上閉伊郡釜石町(現在の釜石市)の東方沖200kmを震源として起こった地震。マグニチュード8.2-8.5の巨大地震。この地殻変動によって引き起こされた津波は、当時の本州における観測史上最大の遡上高である海拔38.2mを記録した程、津波被害が甚大であった。

◇昭和三陸地震…

1933年(昭和8年)3月3日午前2時30分48秒に、明治三陸地震と同様、岩手県上閉伊郡釜石町の東方沖200kmを震源として起こった地震。マグニチュード8.1の巨大地震。大津波の被害が甚大だった。

※3 津波てんでんこ…

(一津波の知識と教訓 <http://www.bo-sai.co.jp/tunami.htm> より引用)

「三陸地方には、繰り返り襲われてきた過去の悲惨な津波被害の教訓として、「地震・津波の時は、親が子を子が親を探していたら逃げ遅れるぞ。てんでばらばらに逃げろ」という教えが「津波てんでんこ」という防災文化として残っています。危機に際し親が子を子が親を慮るのは人の心情としても自然の感情・行動です。しかし、それを否定せよというこの悲しい教訓にはもうひとつの切実な願いが込められているのです。それは、明治三陸津波地震で130戸、昭和三陸津波地震で66戸もの一家全滅という悲劇があったからなのです。代々積み重ね続けてきた家系や血統が一家全滅で絶えてしまうことを懸念し、親が子を子が親を探していたら一家全滅の憂き目にあるかもしれない。家系を絶やさないためにてんでバラバラに逃げろ「津波てんでんこ」となっていったのです。「津波てんでんこ」は。津波哀史から生まれたぎりぎりの住民たちの哀しい叫びなのです。」

※4 祖父・祖母から孫へ言い伝えていたという話…

実際に、今回の地震（東日本大震災）が発生した直後、気仙沼市街の沿岸部で友達とお昼を食べていたという当時高校三年生の女の子は、「津波が来たら高台へ」という祖父の教えを思い出し、お店に会計だけ置き、すぐに友達と高台の方へ走って逃げたため、助かったそうだ。

※5 「想定外」の津波による被害…

津波によって亡くなった方の中には、一度高台に避難した後、金品等を取りにもう一度家に戻ったため、津波に呑み込まれてしまったということもあったそうだ。「想定外」の津波が来るかもしれないことを見通して、いかに「避難」するか。その避難の心構えを住民一人一人が持つておくことも、自分の命を守るために必要なことの一つだろう。



1-2 風土的特徴

地域の特徴と強い関連性を持つものが、その地域の「風土」であると考えられる。「風土」とは、「その土地固有の気候・地味など、自然条件。土地柄。(広辞苑より)」のことである。和辻哲郎の『風土』によると、「(p.16) その様式がそれを産んだ風土に規定せられている」という。また、「このことは「食物」において一層顕著であろう。食物の生産に最も関係の

深いのは風土である。人間は獣肉と魚肉とのいずれを欲するかに従って牧畜か漁業かのいずれかを選んだというわけではない。風土的に牧畜か漁業かが決定せられているゆえに、獣肉か魚肉かが欲せられるに至ったのである。同様に菜食か肉食かを決定したのもまた菜食主義者に見られるようなイデオロギーではなくして風土である。そうして我々の食欲は、食物一般というごときものを目ざしているのではなく、すでに永い間にできあがっている一定の料理の仕方において作られた食物に向かう。パンか飯か、ビフテキかさしみか、等々が空腹時において欲せられるものなのである。この料理の様式が一つの民族の永い間の風土的自己了解を表現する。魚介や海草を食うことは我々の祖先が農業を習得するよりも前からすでに行っていたことなのである。」

このように考えると、唐桑が「漁業」の町となり、その「半農半漁」の生活を生み出したのは、風土による必然性からだったのだろう。町全体を海に囲まれた半島に住み着いた人々は、岩ノリ・マツモ・ワカメ等の海藻やウニなどの貝類を海岸において収穫し、魚を釣り、冬はそれらの収穫物を乾燥して保存し、一年を暮らした。また同時に、唐桑は山に囲まれた半島でもあり、春は山菜を採り、海に行かないときは畑を耕して過ごした。そして、唐桑半島の海と山に囲まれた地形は、周囲からの「孤立」を生み出した。1976年（昭和51年）に国道45号線と唐桑半島を結ぶ、宮城県道26号気仙沼唐桑線が開通するまでは、唐桑は「陸の孤島」と言われた。また、震災直後も、道路が通行止めになり、救援物資の配達が気仙沼市街地と比べ遅れるなどの「孤立」を経験した。この風土的「孤立」が、唐桑町の海と山の恵を享受して暮らす生活をより強く形成したのではないだろうか。また、唐桑町で「結（ゆい）」と言われる特徴的な文化も生み出した。

◆唐桑の風土が生み出したもの①：「結」

唐桑町には「結」と言われる文化がある。困ったときはお互いさまに助け合う、という意味だ。助け合うもの同士を「結っこ（ゆいっこ）」という。こうした文化は、生活環境が厳しい地域でよく見受けられるものだ。例えば、宮城県椎葉村という厳しい山岳地帯にある村にも、「カチャアリ」という文化がある。「カチャアリ」とは、仕事の加勢をすることだ。食べ物に難儀すれば隣の人達が加勢し、助け合う。道路が整備されていなかった時代、誰かが亡くなった折は、部落中のみんなが来て、担ぎ合って病院まで運んだ。部落で、みんなが寄り合い、加勢して助け合ったのだ。また、そんな椎葉村には「村八分」という言葉がなかったという。椎葉村に住む人の聞き取り資料より引用すると、「村八分ちゅうことはないですわねえ、こっちは。お互い、また、自分がそうなったら、迷惑しますから。相手に見下げたことしよったら、こんど、自分がいざちゅうときは、どうもならんけえ。」ということだそう。余談ではあるが、椎葉村は「ハンセン病患者（癩病患者）を差別しなかった村」としても知られる。同様に、前述した通り、唐桑町も「ハンセン病元患者（鈴木重雄氏）が社会復帰するのを厭わなかった村」である。同村共、自然環境のため生活環境が厳しく、お互いに助け合わなければ暮らしていけない村であり、それぞれ「結」「カチャ

アリ」という助け合いの文化を生み出している。「人は一人では生きていけない」ということを痛感している人々にとって、「差別」などということは些末な現象に過ぎないのだろう。

◆唐桑の風土が生み出したもの②：「家」／入母屋造り

「家」の概念が残っていることも、唐桑町の大きな特徴であるように感じる。近代化が進む中忘れ去られつつはあるが、それでも「家を守る」という日本人本来の感覚を保有している家庭が存在する。和辻哲郎の『風土』によると、「(p.170)「家」は家族の全体性を意味する。それは家長において代表せられるが、しかし家長をも家長たらしめる全体性であって、逆に家長の恣意により存在せしめられるのではない。特に「家」の本質的特徴をなすものは、この全体性が歴史的に把捉せられているという点である。現在の家族はこの歴史的な「家」を担っているのであり、従って過去未来にわたる「家」の全体性に対し責任を負わねばならぬ。「家名」は家長をも犠牲にし得る。だから家に属する人は親子・夫婦であるのみならずさらに祖先に対する後裔であり後裔に対する祖先である。家族の全体性が個々の成員よりも先であることは、この「家」において最も明白に示されている。」。また、「このような「家」が日本の人間の存在の仕方として特に目立つものであることは、家長制度が日本の淳風美俗として力説せられることによっても知られる。」。こうした家長制度が唐桑の文化の中に残っており、家の中には祖先の写真が飾られ大きな祭壇を有す部屋があり、正月・盆などの折につけて大切に祀られる。

また、「唐桑御殿」と言われる入り母屋造りの家の構造にも、唐桑町の人々の人間性が現れているように思われる。同じく、和辻哲郎『風土』によると、「(p.173) 人間の間柄としての家の構造はそのまま家屋としての家の構造に反映しているのである。まず第一に「家」はその内部において「距てなき結合」を表現する。どの部屋も距ての意志の表現としての錠前や締まりによって他から区別せられることがない。すなわち個々の部屋の区別は消滅している。たとい襖や障子で仕切られているとしても、それはただ相互の信頼において仕切られるのみであって、それをあけることを拒む意志は現わされておらぬ。だから距てなき結合どものが襖障子による仕切りを可能にするのである。」。東北地方に住む人々の気質として一般的によく言われるのは、「“外”の人には閉鎖的だが、一旦“内”の人になると、とても親密にもてなす」というものだ。唐桑町の人々の気質もこの例に漏れないものだと思う。それは、「唐桑御殿」の、外からみると威圧感すら感じさせるような厳かで物々しい外観と、部屋の仕切りのほとんどが襖障子によるものであるという内の者に対する信頼感・解放感からも、その特殊性は顕著に表れているようだ。

1-3 風光明媚な風景～遊歩道を歩く～

リアス式海岸の地形が生み出す唐桑町の風光明媚な風景は、「陸中海岸国立公園」にも指定されている。陸中海岸国立公園とは、岩手県久慈市から宮城県気仙沼市までの延長 180km の海岸線を区域とする海岸公園のことだ。この美しい風景を見てもらおうと、30 年程前に

「遊歩道」が作られた。当時は「あるけあるけ運動」という外部者 30～40 人を地元人が案内しながら遊歩道を歩く観光活動も行われた。私が歩いたのは、滝浜から御崎までの遊歩道だった。2012 年 5 月 5 日（土）、気仙沼市自然公園巡査員の Z さん（70 代男性）に案内をしてもらった。遊歩道は海沿いに作られており、至るところからリアス式海岸の海と岩をみることができる。木々に囲まれながら、その入り組んだ地形と、絶壁にぶつかってできる白い波のハナの浮かぶ海を眺めることは、実に風情がある。常に人が観光で歩いているような山道ではないため、景色を独り占めする贅沢を味わえるところも大きな魅力である。一定間隔で案内板があり、景観を守るために木をイメージしたコンクリートの手すりがあるため、初めて訪れた人でも歩くことができる。また、要所毎にある展望台や休憩所にはベンチとテーブルがあるため、腰を下ろして景色を堪能することもできる。しかし、東日本大震災の津波の影響で、数か所途切れている道があったり、休憩所に壊れたテーブルやイスがあるため、注意が必要だ。今回の散策では、唐桑で生まれ育った地元の方の案内があったため、その道すがら、この海岸沿いの森林の中で遊んできた子供時代のことを伺い知ることができた。例えば、ササダケから風車をつくっていたことや、そこらの木を切ってチャンバラごっこをしたり、木で小さな舟を作って海に流してそのスピードを競い合ったこと。ノカンゾウ（通称ピョンピョン）を口笛にして鳴らしたり、スマレを使って茎相撲をしたり、アケビの花（通称タンコ）のメシベとオシベを手のひらに乗せ「タンコタンコ起きろーお客様が来たぞ〜」との掛け声に合わせて、手をトントン叩き横になったメシベとオシベをどのくらい立たせることができるか戦ったこと。森の中で遊び疲れたら、サワイチゴを食べたり、木に登り枝の先にある椿の蜜を、ササダケをストローにして口の周りを花粉だらけにしながらかチドリみたいに吸ったこと。遊ぶことと海と山が直結した時代だった。また、季節的に山菜の採り頃であったため、道の途中の至る所でウルイ等の山菜も採った。そして、約 1 時間半の遊歩道歩きを終わると、御崎に到着する。ここには、高村光太郎の文学碑が存在する。高村光太郎は昭和 6 年 8 月に紀行文を書くため三陸海岸を旅し、10 月に「三陸廻り」を発表した。石碑には、この時、唐桑半島を北上する船上で詠んだ短歌「黒潮は親潮を打つ 親潮はさ霧をたてて 船にせまれり」が記されている。また、唐桑御殿を模倣した床が大理石の御殿トイレがあり、唐桑御殿に入った気分を少し味わえるかもしれない。



← 遊歩道から見る景色



← 案内板



← 木を模倣した手すり



← 右がギョージャニンニク / 左はよく似た雑草



← 高村光太郎文学碑



← 御殿トイレ

第2章 半農半漁の生活

2-1 半農半漁

『半島地域漁業の社会経済構造』によると、国内の半農半漁は、東日本（太平洋北区、同中区、日本海北区）と九州・沖縄（東シナ海区）の二大海区に分けることができるという。具体的には、「(p.104) 太平洋北区の岩手，宮城，太平洋中区の千葉，三重，日本海北区の新潟，石川，瀬戸内海区の愛媛，および東シナ海区の諸県に 1,000 前後，あるいはそれ以上の比較的多数の存在が確認される」。一方で、これら以外の都道府県での半農半漁形態の生活は極めて少ない。また、こうした半農半漁世帯において農業と漁業の位置づけとしては、「大半は漁業収入が 7～9 割を占める」。「農業の中身としては自給的な稲作・野菜作が主体となっている」。

特に、三方を海に囲まれる半島地域では、その周辺の沿岸地域には漁村が形成され、そこでは少なからずの半農半漁経営が営まれていることが多い。唐桑半島もその典型であるといえるだろう。唐桑半島でも農業の位置づけは、「自給自足」といった色合いが強い。一方で、漁業は主収入源だ。ちなみに、海は水田の代わりを果たしていたともいうことができる。唐桑半島が東半分を取り囲む気仙沼湾は、「(p.79) 船の航路以外の海面は、牡蠣、帆立貝、昆布、若布の養殖漁場であり、養殖筏で埋め尽くされて」いたという。「気仙沼地方の水田の面積は約九百ヘクタールしかないが、実は海に三千ヘクタールの水田があるといえることもできる。湾内に浮かぶ養殖筏一台は、水田一ヘクタールに匹敵する経済的

価値を有している」のだ。

また、『山に暮らす 海に生きる』の中にも、唐桑町の半農半漁の生活が記事としてある。(p.72 より) 以下は、海の畔に家と畑を構え暮らす老婦人の言葉だ。「一年のほとんどはここ(畑)に通う。心が疲れないもの。空が広いからかな。畑仕事にあきたら海へ行く。岩ノリ、マツモ、たまにはウニ。ごちそうは次々にやってくる。ここが私のデパート」。昔は唐桑にスーパーもコンビニもなかった。気仙沼市街地へ向かう道路も整備されていなかった。それでも決して、食べるには困らなかったのだ。それは、自然のスーパーをそれぞれの家庭で有していたからだ。自分が口にするものを、自らの手で紡ぐということ。こうした半農半漁の生活とは、「人が生きる豊かさの土台」ということができる。

2-2 一年の行事(聞き取り)

唐桑町における一年の行事や昔の生活について、2012年11月26日(月)に聞き取り調査を行った。語り手は、唐桑町在住のXさん(60代男性)、Xさんの妻(60代女性)、Xさんの母親(80代女性)の三名。

◆風土と人と海の関係について

・春のドカ雪(とんでもねー雪)が大事

Xさん「春先にねえ、ドカ雪が降んだよ。一旦。入学式シーズンにさ。毎年じゃないんだけど。とんでもない雪が、量が降んだよ。あのね、やっぱり、こう気象状況も異常っていうか、変化してんだよな。」「(ドカ雪が降ると、海にいい養分が入る。)山に蓄積した腐葉土のさ、おいしいものをその水が含んでっから、それが川から海に入って、牡蠣とかさ、魚とかそういうことだよ。」Xさんの母「(収穫が悪いときは)“今年ドカ雪が少なかったからな”って(言うわけよ。)」

・海の循環が大事

Xさん「だから、台風も、ある程度の台風は必要なんだよ。海の中を攪拌してくれるから。本当は台風ってのは来てほしくないのが俺たちの考えでしょ。でもさあ、あの、人とか家に被害のないような台風は、大いにつてか、できるだけ季節の変わり目にはね、あった方がいいんだよ。海の場合。おそらく陸の畑だってそうだと思うよな。まあなんていうかさ、衣替えみたいな感じなんだよな。海の中の衣替えだよな。だからねえ、湖でも海でもさ、やっぱりある程度、ときどき水がね、少しこう、回らないとダメなわけよ。」

「(今年も結構台風来た?) うん。来た来た。まあ台風よりも大きなものが来て、まだ、なあ、逆に言えば津波のあれがまだあるらしんいんだ。だからある程度ね、海の中も津波によっても浄化はされたんだな。反面、津波で陸上から流れたものが、逆に溜まっている分もあるから、ねえ。でも牡蠣とか帆立とかね、ああいうのが、順調に育ってるっていうのは、やっぱり栄養分があるということは間違いないし。で、震災前よりも、養殖施設が減少したわけよ。だから、(例えば)ここでは一つのりんごをさ、三人で食べんのと、一人

で食べるのでは全く違うでしょ。そういう現象が起きてる。(以前は) 過密状況だったんだよ。帆立でも牡蠣でも若布でも養殖でも。だからこれはさ、それこそ神様っていうと笑われっけども、やっぱりお前たちこういうね、自然をこういう勝手な使い方していいのかって、少し整理しなさい、っていうさ、忠告みたいなもんよな。うん。あまりにも大きな忠告になったけどさ、結果的にはね。だと思ふ。(震災後は過密だったのが) 除かれたから、若布でも、あのお、やれる人はもちろん少なかったから。資材がない、船がないって人が大方だったけども、まず、支援団体から協力していただいて、まずやれる人がやったわけ。それがもの見事に“正常の生育”になって、それを収穫して販売できたっていうのも、現実だからね。」

・人が採らないとバランスがくずれる

Xさん「昆布ってのは、アワビとかウニの餌になる。そこはね、うまくね、アワビとか昆布が共同生活してる。それが、どっちかが異常に増えると、バランスが崩れて、ね、磯焼け現象とかさ。だから、(人が) 収穫しないで海の中にそのままにして育てておくってのはさ、ナンセンスなわけよ。かえって海を殺してしまうわけ。昆布だって、アワビだってウニだって増えれば増える程、海のためによくないわけ。(アワビは) 稚貝をある程度養殖して海に放流して、それが3年から5年かけて大きくなるわけさ。で、あとは自然に、自分たちで繁殖して増えていくのもあるし。だから、海ってのは両面でいってるわけよ。(人が採らないと) 海が汚れて、昆布だのが腐ってしまうわけよ。水温の関係で。だから今年もね、天候が異常で、あの畑作物も海のものもとんでもない結果になってるわけ。水分が不足して。海だって雨水がないから。そんで、寒さも通常だと十一月頃から寒くなってくるわけ。それがやっとな最近でしょ。十一月過ぎようとしているとき。海の水もまだあったかいわけよ。だから本来ここで獲れないような魚が、極端なこと言えば、九州あるいは奄美大島で獲れる魚が、こっちにいる。それくらい、(今年は) 海水温が高い。だからメカジキとかなんかのあれも、獲るには獲れても、例年の四分の一とか五分の一とか獲れば御の字ってわけよ。森も空も上手く回らないと、全ての食べ物生き物にとっては死活問題になるわけだ。だからほら、CO2のことで京都議定書とか騒いでるでしょ。結局そういう風なことをよく国が、国民に説明しなきゃ、わかんない人が多いのよ。ほとんどが。何のことを言ってるのかと。“そういう風なことを無視してやっていると、みんながやってる海の仕事もできないよ。畑の仕事もできないよ。”って含めて話してもらえば、“ああ、そうかあ、今CO2のことどうのこうのとか、京都議定書がどうのとか、このことか。ほんじゃ俺たちも、(これは) いいことだとか悪いことだ、とかなるっちゃ。政治だなんだってのを関心もたせるような説明責任がなあ、説明の仕方がなってないんだよ。結局今、インターネットだパソコンだっていうことで、コマーシャルでもなんでもやってるけど、分からない人が多いんだよ。あまりに万人向けの情報を提供してないと思うんだ。俺は。だから我々は蚊帳の外に常におかれてるってわけさ。(一番影響するのは) 第一次産業の人達で。都会ではさ、やりたい放題やって、その悪影響が結局出たんだからな。」

◆年間行事について

・正月

Xさんの母「一月の十五日まで、神様さ、お膳あげるわけよ。そいつを今は略してさ、五日まで上げて。そんで最後の十四日の晩にお膳あげて、十五日の朝にしめ縄を外して。」

Xさん「ただその間（一日から十五日の間）にここの家なり、うちの身内のところで（誰かが）亡くなったりした場合は、（しめ縄を）すぐ外すわけよ。」

Xさんの妻「だからこの辺はさあ、あそこでしめ縄外したから何かあったんだね、って分かるわけよ。」

Xさん「（小正月の家を訪ねての行事は）そういう家にはやらないの。しるし（しめ縄外している）があるから。」

Xさんの母「うちの場合は、今までは氏神様に納めてたの。」

Xさんの妻「最近だもんね、どんと祭に持ってってやるようになったのは。それまでは自分の家の神様に。ただ後ろの方き置いてくんだよ、そうすると一年経つと腐るから。」

・小正月

地区ごと／へんよい舞／冬休み中の行事

Xさん「（小正月の行事は）地区によって違うのよ。やってる目的は同じなんだけどね。やり方が違うわけよ。大沢が木で（魚の形に）作ったやつで、うち（宿）の方は切り絵で作ったお魚（鯛）で。」

Xさんの妻「子供達の休みに合わせて。冬休みの行事だからさ。今度の休みに切り絵作って、魂入れしてもらって。前までは男の子だけだったんだけど、男の子少なくなったから、女の子も混ざって（歌って。）」

Xさんの母「神主さんに切り絵を持っていて拝んでもらって“魂入れ”してもらうわけ。それを一軒一軒配って歩く。大漁旗をかざして。唄い込みね。“へんよいへんよい”って。（私の頃は）“せんたくせんけらいん”ってやるわけよ。“洗濯代ください”って。女の子達は。何にも持たないで一軒一軒歩くのよ。例えばお年玉だよな。」

※高度経済成長期の頃はやっていなかった

Xさん「（Xさんのときはもっと大きな行事だったの？）俺たちのときは“へんよい”ないんだよ。俺はやった記憶ないのよ。そんなのも忘れた時代もあったんでねえ。それこそ色んなさあ、ものが上手く回っていたから、あえてそんなことをやなくなたって（よかつたって時代も）あったんだよ。そんで今度は斜陽になってきて、“あれ、これはだめだ、やっぱり昔はこういう風なものがあったからこれやっべ”とかってなったんだべ。（高度経済成長期とかの）影響があつと思う。だからほら、実は俺みたいにやらないのは、意外と分かっているようで分かんないんだよ。そのこと聞かれるとな。それではダメだから、という

ことでほら、じいさんばあさんから聞いて、もう一回昔のそういうことを、故郷の伝統的なものをやろうということで、また出てきたんだ。だから、人間なんて都合いいんだよな。全然困らないっていうかさ、全て順調なときは、もうそんな神様とか思いださないでな。で、大変になって初めてさあ。だから、家ではまだこういう 80~90 代の人がいるからだけど、今はいない人多いんだよ。だからそんなの全然分かんないで生活してる人が結構いるわけさ。だあそれではダメだから、この震災を機に、もう一回、絆じゃねえけど、隣組とかね、そういう風なもので（昔を思い出して）確認しあってやりましょう、ってなことにもなったわけよ。だからね、よくボランティアに来た人達が“ほんとに大変だろうな”って“なんて声かけよう”と思ってみんな心配で来てるわけだよな、ところが、足を踏み入れてみたら、そんなにしょげてるような状況でもない。逆に来て励まされたってよく言うっちゃ。まさに結局、そういう昔のことをまだ頭にある人が健在にいるから、その人達が“これ（震災）に負けないでやってくっぺ”ってなものがあるから、そうなるさな。結局そういうのを知らないと、“ああ、どうしたらいいんだべ。家もねえ、職場もねえ、お金もねえ”ということになってしまうわけよ。」

・盆／盆船を流した

X さんの母「(最終日は) 海に盆船を流して。今は海汚すからって流さないで。そして朝、海岸で (船を) 燃やすの。」

・早馬神社での祭り

X さんの母「昔は 9 月の 19 日なんだけど、今は (人がたくさん来てくれるように、子供達の休みを利用するために) ここ何年かは十月の第一日曜日になった。まず、早馬神社の (麓の) 社務所で祈祷して、早馬山のお山に登るんだけど、てっぺんまで登らないで、早山神社の裾の休み処で神輿を休ませる白い石があるから、そこで休んで。そんでまた、お神輿担いでまた下がって行って、あとは (お神輿と共に) 船に乗って、御崎神社の沖まで回ってくるわけ。またそれで (早馬神社に) 戻ってきて、初めて今度は本殿に神輿を納めて、お祝いして参拝するわけ。昔は一日がかりで、出店がいっぱいで。昔は小学校も休みだった。お祭りのときは普通の日だった (日曜日ではなかった) から。」

※地域で営まれた学校／公欠扱い

X さん「(昔は学校も) みんな公認欠席って扱いだった。地域の行事に参加ってことで。だってほら、アワビとかウニとか若布とか昆布なんかも、浜に降りてとるときも、俺たちのときなんか、中学校のときとか、家の手伝いするっていうので公認欠席扱い (だった)。そんで行ってきた人達は、先生にアワビとかウニとか持ってきて。」

X さんの妻「(娘・息子のときも) そうだったよ。今はうるさくなっただでしょ。文部省も何もね。」

X さん「昔は自分たちがやることを学んで。」

・海の神様 12月3日 恵比寿様 どんこ汁・魚を供える

Xさんの母「えびすこって、この日はお魚をね、神様さお供えして、お魚さ食べる日なの。どんこを食べるの、家じゃ。白身の、おいしいの。」

・農の神様（野菜） 12月10日 大黒様 豆を炒って、豆まきをする

Xさんの母「大黒様のお祭りするわけ。これんときは、豆炒って、豆まきするの。（家の）神棚にも、恵比寿様、大黒様、どっちもいる。魚持った方と、野菜持った方と。“東大国 西恵比寿” ってね、置き場所が違うんだよね。

・12月31日 年越し

Xさんの妻「（この辺は）なめたカレイの煮つけをつけるでしょ。それに牡蠣の酢の物でしょ。あと紅白のお刺身でしょ。赤身と白身と。白はメカジキで、赤はマグロで。それにアワビのお刺身がついて、タコとかね。だって“そのとき食べようね” って取っておくんだもん。あとはその家によって色々ね。」

◆昔の海仕事について

・手作りのり

12月 しばたて（のり）

2～3月 のり収穫（寒い時）一日で乾く。乾かないときは、中に入れて次の日に再度干す。

Xさんの母「のりなんかも、のり養殖ってのはねえのさ、昔は。山の木を切って縛って、それを海に立てて、それさのりを付けたもんなの。今なら筏でのり養殖してるでしょ。そういうあれが（昔は）なくて、個人個人で、まあ好きな人たちね（やっていた）。自分の山の木を切って、（その小枝を）“しば” って言うんだけど、“のりしば” ね。それで、（遠浅の海に立てたら）自然に（そののりしばの枝枝に）のりがついて。それがね、海水と真水の合流する場所が一番のりが付くわけ。それ（のり）を手で摘み取って、叩いて、細かくして、（桶にはった）水に浮かばせて、攪拌させて。それですだれ（の上）に、（底板のない）真四角のますをして（枠にして置いて）、そこに（水の中で）攪拌させたのりをすくって、ぱっとやる（すだれの上のにりを敷く）わけ。だから（のりの厚さを）平均にするためにはね、さっとやらないとだめなの。そしてそれがね、水がすだれの下に降りるから、そしたら（ますを）取って、また次に同じく（別のすだれで）やるわけよ。それで（のりを攪拌させた）水がなくなったら、（今度は）“のり干場” ではせかけするわけ。（干すときはまず）表を出さないで、のりのすいた方を反対にして、（裏を）先に干すわけ。で、だいたいあれしてもいいなって時間をみて、裏返しして、表出すわけ。そして乾燥させるわけ。お天気がいいと一日で乾くから。それを今度はね、剥がして。その収穫が面白いんだ。家の中で座って、のりの剥がし方するわけ。剥がすのはね、のり付いてるでしょ、それをこ

う伸ばすと、自然とね（パリパリと）のりが剥がれるわけ。で、それを今度はこう裏返しして、のりを押さえて（すだれを）剥がすわけ。で、きれいに（剥がれる）。で、これを次から次へと重ねて、同じあれで十枚ずつ、作って、十枚ずつ束ねるわけ。それを“一丁”っていうのよ。十枚で一丁。それを千枚か五百枚か作るわけよ。全部手仕事だから。それでその一丁を束ねるわけよ。一束を十丁（百枚）にして、それをねえ、お茶箱に詰めて、そして気仙沼の間屋さんに（船で）持ってく分け。昭和8年の三陸津波まで、家の親たちがやったんだな。」「(季節はいつごろ?) 葉が降り始めたころに山から木を切るわけ。それを現場さ持ってきて、葉っぱを扱ぐわけ。そしてある程度の長さに切って、はじっこの枝葉は残して切って、そして切り口の方を（海に）刺しやすいようにとんがらせるわけ。そして枝葉の足りねえ分を合わせて（長くさせて）藁でひとまとめにして、遠浅の（干潟）のところに刺すのをやったのよ。十二月ごろに“しばたて”が始まるわけだ。で、収穫が2月から3月の寒いときに。」

補足) ちなみに、6月にウニの開口、11月にアワビの開口などもあるが、漁業権があって組合員の人でないと参加はできない。それを持たない人が海と関わりを持てる機会は釣りくらいのような。

参考：年中行事表（平成二十四年）／御崎神社々務所より

一月 一 日	歳旦祭
一月 七 日	八雲神社七草祭（天王様）
一月 十四日	御崎神社宵祭 どんと祭
一月 十五日	御崎神社例祭
一月二十三日	旧正月
二月 六 日	旧小正月
三月 二十日	春分の日
三月二十四日（旧三月三日）	旧節句 ひな祭り
六月 三 日（旧四月十四日）	八雲神社宵祭（天王様）
六月 四 日（旧四月十五日）	八雲神社例祭
六月 十七日（旧四月二十八日）	鯉登り
六月二十四日（旧五月五日）	旧節句 端午
八月 二 日（旧六月十五日）	御崎神社夏季例祭（崎祭）
八月 十三日～十六日	盆
九月 十六日（旧八月一日）	地主神社例祭
九月二十二日	秋分の日
九月 三十日（旧八月十五日）	十五夜
十月 七 日（十月第一日曜日）	早馬神社神幸祭（九月十九日例祭）

十一月 十五日	七五三
十二月 三 日 (旧十月二十日)	事代主祭 (お恵比寿様)
十二月 十 日	大国主祭 (お大黒様)
十二月三十一日	年越

第3章 山と共に生きる

3-1 山と信仰

山というと、現在は登山等のレジャーの対象というイメージが強い。しかし、『東北の山岳信仰』より「(p.2) 昔の山は登るためにあるものではなく、尊い霊の鎮まる所として遠く麓から仰ぎ望むことが理想とされた」のだ。だからといって、全ての山が信仰の対象となるわけではなく「山容の端麗な樹木の繁った山とか、神霊の依代となりそうな巨岩巨石の並ぶ山とか、時に火を噴いて恐れられる火山とか、特殊な山」などが選ばれて、人々の信仰の対象となった。また、山に登ると、登山道の途中や山頂に神社があるが、「(p.4) 山にはごく古くは登拝の習俗もなかったから、山麓に遙拝所を設けてそこから山容を拝するのが自然で」あった。「(p.4) 修験道がおこり山岳仏教が盛んになってくると山に登って修行する者も多くなり、山頂にも神の常在を願って奥宮とか山宮と称する社殿ができるようになり、登山口もいくつかに分かれ、口ごとに拝殿が建つようにも」なり、そうした遺産の一部を我々はみているのである。

こうした信仰に「祭り」は付き物であるが、例えば、東北の山の祭りは主に四つに分けられるという。「(p.32) (1) 狩猟その他山仕事の守護を願う祭り (2) 霊魂の再生に結びつく祖霊の供養を中心とする祭り (3) 稲作を守ってもらう五穀豊穰を祈願する祭り (4) 海の安全と豊漁を祈願する祭り」の四種類である。山の神に祈る事柄は、山仕事や農業に関するだけでなく、海の信仰を伴うことも多い。例えば、漁場を定めるとき、「(p.6) 沖に出て四方水の中では遠くに望む高山ばかりがよりどころで、どの山とどの山を結んでという線上に漁場を定める」という。また、山と海のパイプ役を勤める川では、「(p.6) 海と緑のある山寄りの神々が浜下りと称して川を伝って海岸に下り、潮を浴びる習俗が福島、宮城県あたりの海岸地方に見られる」ことがある。「(p.6) 宮城県加美郡の熊野神は、昔、浜市の浜に寄り着かれたということで、何年かに一度鳴瀬川を下って浜下りをされる。室根山の祭神も熊野であるが、養老の昔、紀州の牟婁から海路宮城県の唐桑半島に上陸、湯の花によって占った結果、室根山上に鎮座されたという伝承で、今でも祭りごとに唐桑から潮水を竹筒に入れて奉るならいである」といった具合である。

このように、山と海は深い関係を持っている。漁師の仕事と山は切っても切り離せないものである。以下は、『森は海の恋人』に記述された、唐桑のある古い名人漁師の言葉である。「(p.22) 一人前の漁師になるには、先ず海が好きになること、そして、せえごがいい (や

る気がある) ことだな。次に山測りを覚えること。良い漁場は誰も教えてくれないから、自分で漁をやってみて経験でおぼえるしかねえ〜んだな。覚えた山測りは、自分だけの財産になんだから必死に覚えんのっしや。山測りは位置や距離を確かめるだけでなく、天気を予測する目安としても、大切なもんしや。昔の人は、藤治ヶ根まで、一日がかりで櫓を漕いできたんだからねえ。真剣に山を見てたようだね。命がかかってんだからねえ、山は神様みたいなもんだねえ。」ということだ。海の上で自らの船の位置を確認することにも、魚がよく獲れる漁場を探すのにも、天気を予測するのにも、全て山が目印となっていた。また、前述したように、冬になると、漁民は「(p.145) 春のドカ雪」が降って山に積もらないかと、天を仰ぐ。海苔や若布、牡蠣、帆立貝の養殖をしている漁民にとっては、海水中の栄養塩類や餌となるプランクトンが豊かであることが大事なことになる。海水中に栄養を与え、海の幸が育まれるためには、山の雪が解けた河川水である雪代水がとても重要な役割を担っているため、漁民たちは雪が降ることを願う。漁師が抱く「山に対する感謝の気持ちや、大自然に立ち向かう時の謙虚さ」は、こうした経験から生まれるようだ。

また、山は漁民の日常生活とも切り離せない関係にあった。「(p.30) 唐桑の漁民の生活は、鰹漁が中心であった。初夏から柿の実が赤くなる晩秋まで漁期は続いた。しかし海で働く男達が、どうしても山に行かねばならない時期があった。それは、冬場から早春にかけて、一年分の燃料を確保する必要があったからである。石油、ガスの登場による燃料革命が起こるつい四十年ほど前まで、冬場の約一ヶ月、漁民は山へ通っていたのである。一年分の燃料を用意することは、年中行事の中でも、最も重要な仕事であった。鰹漁に携わる人びとの多かった鮪立という地区の古老の話によれば、不幸があったり病人が出たりして生活に困った時、隣に米を借りに行くことはできても、燃料の薪を借りに行くことはできないという不文律があったという。だから、何を差し置いてもこの時期になると、山へ通ったのである。唐桑半島は、半島の東側は山が少なく、西側は山が多い。東側の人たちは、木の葉がおち、年末が近づく頃、ごんどさらいといって、主に松林に行き、万鋏で松の葉を掻き集めて束にし、木小屋に蓄えて燃料にしていた」という。

三陸の漁師と深い関わりを持つ山に、岩手県に室根山と呼ばれる山がある。「『東北の山岳信仰』 p.206) 室根山は古くから拮梗山、卯辰山、また鬼首山などと称し、海拔八九五メートル、北上山脈の太平洋沿岸にあり、かつては陸奥国盤井、江刺、胆澤、気仙、本吉、牡鹿、登米七郡の総鎮守として崇敬を集めていた」山だ。近年まで「山麓の岩手県東盤井郡室根村、同大東町、同千厩町、同川崎村、陸前高田市、宮城県本吉郡唐桑町、気仙沼市など二市三町二村にまたがっての信仰が篤く、ことに三陸沿岸の漁師たちにとって、大切な信仰の目標」となっていた。現在も室根山では、海の恵みに対する山への感謝を表す行事が行われている。それが、唐桑町舞根地区の牡蠣養殖漁師・畠山重篤さんが1989年から開始した室根山での植林活動だ。「いい牡蠣を収穫するためにはきれいな海が大切であり、そのためには豊かな森が必要だ」という考え、古来から浸透してきたが近代になって忘れかけていたことを再燃させて生まれた行動だ。気仙沼湾に注ぐ大川は、室根山から流れ出

てくる。この気仙沼湾と大川、室根山の様子を、畠山重篤さんが気仙沼湾に浮かぶ大島から抒情的に記述したのが以下の引用である。「(p.77) 森のそびら辿りてゆけば海に逢う 悠久よりの生態系は／気仙沼湾頭に浮かぶ大島は、この島出身の詩人水上不二によって緑の真珠と讃えられている。その優雅な姿からは想像しがたいが、内海を太平洋の荒波から守る天然の大防波堤でもある。しかし、船を沖に出して外海から眺めると、私の眼には緑のフランネルの帽子を浮かべたように見える。船を観光客で賑わう浦の浜に着け、島の真中に聳える亀山山頂に登ると、三六〇度のパノラマが展開し、遮るもののない正面には、太平洋の雄大な姿が人間の存在など圧倒するかのようによか水平線まで広がっている。北側には唐桑半島、南側には岩井崎が突き出ている、太平洋から直に打寄せる大きな波のうねりが岩に砕けるたびに波の華と化し、黒い岩肌を白い波のレースで縁どっている。目を外海から一八〇度転じて内海にやると、そこには対照的に、波一つ立たない沼のような入江が続く。気仙沼湾である。正面には一際高く室根山、そして手長野の峰々が続き、海を取り囲むように、緑の山々が優しくその両腕に海を抱いているかのようだ。そして、それ等の山々を源とする大川が、一条の光となって静かな入江に注いでいるのが手に取るように見える。」

山の森林が豊かであること、川が豊かであること、海が豊かであること、この全てはつながっていて、これら全ての関係性から成る恵みが人々の生活を潤す。時代は変わっても自然の摂理は変わらないからこそ、現在でも植林活動という形を取りながら、ゆるやかに山への信仰心が育まれていっている。

3-2 唐桑町での山菜取り体験

体験日：2012年5月1日（火）

毎年4月末～5月になると、山菜採りを唐桑では行うという。初めての山菜採りの現場。唐桑の住民の知恵に驚きと発見の連続であった。

まず、山菜の種類が多さとそれを見分けられる知恵に驚いた。今回同行させてもらい主に採ったのは、タラの芽（たらっぼ）、コシアブラ（うそっぼ）、ワラビ、コゴミ、ウルイ、シドケであった。タラの芽とコシアブラは少し似ている。しかし、タラの芽の方が木の枝や芽も少しイガイガしている一方、コシアブラはつるつるとした木と芽をもつ。タラの芽はイガイガのタラの芽、コシアブラはモチのタラの芽、と認識して採っているようだ。また、コゴミは一つの根から5～6枚程の葉が生えているのだが、その全てを採らず、一枚は来年の生育のために採っておく。採り頃は育ちすぎでないもののおいしく、同じ山の中でも場所によって草の育ち具合や取り頃が変わってくる（例えば、奥の方は光が当たりにくく、温度が低くなるから、山の手前のものより育っていない等）、おいしい山菜を毎年採るための細かい知恵が、ひとつひとつあることを知る。

また、唐桑の人の山を見る視点は、都会の私のそれとは全くもって違うものだった。草の生える野原や、木が生い茂る山の風景をみても、私は「ああ、きれいだな」としかこれ

までは感じなかった。しかし、唐桑の人は違った。一緒に車に乗っていると、「ああ、あそこにタラの芽あった！ああ、あそこにも！！！」「ここはもう採られているねえ」など、時速40km程で走る車内からでも、こんな言葉がたくさん聞こえてきた。山菜採り中に山道を歩いていても、私からみるとただの“草の山”を見て、ふと、「あ〜！もったいない！この葉っぱ！どんなにかいい腐葉土になるのに！」などということを自然と発する。その発言の一つ一つが、私には新鮮な驚きだった。そして初めて、これまでただの“草”としか都会っ子の私には見えていなかったものが、「自然の食の宝物」であったことを知る。そんな「食べる」の広がる風景と、それをみることのできるその生活は、とても豊かだと感じた。

そして、山菜を追い求める執着心はもう、驚きを通り越して、思わず笑ってしまう程のものだった。まるで水を得た魚のように、自分の庭のように、遊び場を駆け回るように、山中を探し歩くその姿に、私は全くついていけなかった。50代後半を超えた人達に、全くついていけない21歳の私。本当に山菜を追い求める素早さとエネルギーは、圧倒的なものだった。

途中、木漏れ日の中の小川のせせらぎで休憩を取りながら、16時過ぎに家に戻って、軒先で山菜の仕分けをする。今日の山菜採りは急遽だったのでそんなに採れなかったが、普段はもっとたくさん採って、近所の人達におすそ分けするのが恒例のようだ。（実際、その数日後、岩手県のばあばの実家の山まで行って、たくさん山菜を採ってきたみたいだ。）

この日最も感じたのは、土地にある自然と共に暮らす、「食べる」という根本的な意味での「生きる」に根ざす生活は、たくましく、美しいということだった。

第3章 海と共に生きる

4-1 海と信仰

海には、私達の疲弊し弱まったところを癒し勇気づけてくれるような力がどこかあると思う。『海洋性』によると、日本文化の内面的な特徴として「海洋性」なるものがあるという。それは「(p.21) 魚類は衆庶の脳裡に深く浸み込んで」おり、「我が国民性と漁業との間に想像以上の内面的連関」があり、それは「日本人の生活と密接不離」である。」ということだ。例えば、おめでたいときに海の魚「タイ」でお祝いをしたり、何か不浄なものに接したとき「シオ」で清める等、こうした行動は「(p.18) 海のものを取り込むことによって生命力が更新されるという考えにもとづいている」のだ。つまり、「(p.33) 日本人の多くが海に背を向けた生活を続けて来た。海辺には農村ともいべき村の方が多くみられる。しかし、その一方で、祭りや祝い事などに海産物を供物や贈答品として用いたり、浄めとして塩や潮を用いる週間は海辺だけでなく日本全体に広くみられる。われわれの心のうちに「潮の濃さ」を感じ取ることができる。それは「海に根差した行為思考上の様式」つまり

「海洋性とも称すべき伝統」である。日本文化には海のことを不可欠とする「海洋性」の伝統が見いだされるのである」ということである。

このように日本人にとって生命に関係する匂いを放つ「海」は、必然的に信仰の対象となっていた。もちろん、唐桑町でも「海」は強く信仰されている。初めてそれを目の当たりにしたのは、唐桑に行った当初の瓦礫撤去作業中にみつかった、ある詩人の縦軸であった。それは、気仙沼湾にある大島出身の水上不二の詩であった。「海はいのちの源。波はいのちの輝き。大島よ、永遠に緑の真珠であれ。」というものだ。そこには、「海」を生きとし生けるもの全ての母なる源と信じるころがある。また、津波で大切な知人友人や家、養殖施設という経済基盤を失った人がぼつと口にした一言にも、「海」を単なる海以上のものに思っているころを感じた。それは「海もかわいそうなんだよ。海も泣いているんだからね。」という発言だった。これらの詩や発言から、日常生活の感覚の中に根付いている「海」への信仰心を伺うことができる。

実際に、唐桑町では海と神を信仰する行事が多く存在した。昭和30年から40年代にかけては住民の約9割が漁師で、遠洋漁業のマグロ船で1年以上航海する者も多く、その分、海と神に対する信仰があつたのだ。漁師は「縁起を担ぐ」ものだという。唐桑の漁師さんは、出漁の前になると、「オカミサン」と言われる人のところへ行って、漁を占ってもらった。オカミサンとは、船の守護神であるお船霊様の言葉を伝える巫女のこと、出漁前のみでなく、不漁があると、厄を祓ってもらったりもするようだ。また、漁師の女たちも、『山に暮らす 海に生きる』の1995年～1996年における記事(p.47)によると、男達がマグロ船に乗り1年半もの航海に出ている間、毎月1日と15日、町内八十余の神社に願かけ巡りに出続けたそうだ。「大漁で帰港できますように、航海が無事でありますように」との願いを、浜ごとの神社に願をかけ歩いたのだ。その他にも、「唐桑には「神様アソバセ」というものもある。主に正月から春先にかけて、女性たちが巫女の家を集まり、集落の神様の託宣を聞くという風習だ。巫女は、その年の天候や漁、田畑の作柄など一年の占いを語る。」。

例えば、半島の南端には、「おさきさん」の愛称で親しまれる「御崎神社」がある。「境内には、ふくよかな笑顔のえびす神と大黒様が祀られている。」。また、「境内にはほかに、えびす石というものもある。」。これは、海から浜に打寄せられた石を『寄り物』と呼んで昔から大切に扱った風習があり、その『寄り物』の石を、漁業の神であるえびす神に見立てて祀ったものだ。」。ここから、「海からもたらされたものは、石でさえ恵みであるという、漁民の生活感」を伺い知ることができる。

また、こうした海への信仰を表し、大漁や無病息災を願う行事は、こども達にも根付いてきた。小正月の1月15日にされる行事から見て取ることができる。小正月行事は、唐桑半島内でも地区ごとに異なる。例えば、唐桑北部の小原木地区では、「えべっしょ・かせどり」というものが行われてきた。「えべっしょ」は「恵比寿魚」が由来とされ、魚に見立てた板を海水で清め、男の子が「えべっしょ」と声を掛けながら家々に届けた。「かせどり」

は女の子担当で、アワビの貝殻を入れたざるを玄関で振って鳴らし、厄払いをした。また、唐桑中部の宿地区では、「へんよーい」というものがある。「へんよーい」は、櫓をこぐ掛け声であり、「大漁唄い込み」の合いの手でもある。今では子どもたちが各家に「鯛」の切り紙を置いて歩く行事だが、以前は各家でカツオの形をした切紙を作って配ったというから、これもカツオの大漁祈願として行われていた。

このように、唐桑には「海という自然の凶りがたき、人知を超えたものに対する畏敬の念が深く息づいて」おり、それは信仰という形をとって表わされてきた。

4-2 漁師さんからの聞き取り

引退した漁師さんから聞き取りを行った。聞き取り日時は2012年11月26日(月)。語り手は、引退漁師のWさん。水産高校を出て、18歳で船乗りになる。21歳のときに船長の資格を取り、24歳のときに船長になった。船長兼衛生管理(船の中の医者)をしていた。30年ずっと船長を務める。Wさんの船の船員は20—30人でみんな日本人だったという。

Bさんの経歴を簡潔に示すため、Bさん記述の文をまず引用する。

『タイトル：鮪船乗船時代から現在の思い出

「昭和三十二年水産高校を卒業し、その年の七月に唐桑鮪立の船主「(船名／割愛)」三百五十トンにお世話になりました。

その当時は、南太平洋・北太平洋・インド洋等どここの漁場で操業しても甲板上は魚々の山でした。

それと共に「縄れ」も沢山あり毎日夜明けまで縄れ解きをしました。当時は交代も無く乗組員全員で投縄でした。お互い疲れ果て、食事の時は、皆箸や茶碗が手から滑り落ちることも知らず眠入ってしまう光景が思い浮かびます。私もそのようなことを知らずに乗船しましたが、今振り返ると自分の為にも良い社会勉強だったと思っています。

乗船当時は、何もかも見る事聞く事全て初めてなので、皆さんの言うこと、仕事の動作等を見て育ちました。古参乗組員の中には、新人を馬鹿にするような人もおりましたが、私も早く一人前になりたくて、昭和三十五年の時二十一才で下船し海技免状を取ろうと講習に行くことにしました。ところが乗船履歴が二か月足りないことが判明し、船主から必要な履歴をいただき講習を受けることが出来ました。

当時の先生は、「小林先生」でした。先生に“そんな若いのに初めから乙一で受けるのか？”と聞かれましたが、“自分で決めた事ですから先生宜しくお願いします！”と伝え受験した結果『合格』でした。

その時は嬉しさとともにこれからは何処の漁船に乗船しても馬鹿にされぬという思いで心には余裕が出来ました。

その当時は船舶職員が不足で何処でも引っ張りだこでしたが、恩返しの気持ちで初めて

お世話になった「(船名/割愛)」に二等航海士として乗船しました。ところが出船に免状証が間に合わず出航してシンガポールに寄港し免状を受け取りました。

(中略)

お陰様で乗組員や船主等に恵まれ昭和三十五年六月から航海士十年間、それ以後は船長兼衛生管理者として働く事が出来ました。この間、いろいろな怪我、事故、事件等がありました。今思うと良い経験になっております。」

・漁師文化について

幹部は<船頭、船長、機関長、無線長>の四人。

船頭(=漁労長)が漁を仕切る。漁場のどこに行くかを決定する。給料は固定(船主から漁があってもなくてももらえる。それに加えて、水揚げ金により歩合制でもらえる。

船長が航海中の全ての責任を背負い、漁場まで船を導き、港の出入りを担当する。

船主は船の持ち主で、メンテナンス費等含め、売上の7割をもらうらしい。

Yさんが最前線で漁に出ていた時代は、マグロ漁はもうかっていたため、漁師は人気職業だった。「おらさ船さいるときは、(漁師の職業は)ほんとに花形よ。それこそ金使っても使ってもあったんだもん。そのときに唐桑御殿建てたの。(奥さん:昭和40年ちょっと辺りに家を建ててもらったの。)」毎回大漁!しかし、1990年代あたりから、日本人で漁をする人が少なくなり、現在はインドネシアや中国から来た人を雇っている。

「(例えば、一億五千トン以上釣り上げて歩合でもらえるようになったとすると、その)三割を船員がもらうわけ。船頭(漁労長)、船長、機関長、無線長、船(の上)では幹部はこれで、この他に、船長の下に一等航海士、二等航海士、三等航海士があるの。資格持ってるから。(おらは)船長兼衛生管理だったよ。国際免許。船で怪我して何かあったりとか、あとは注射とかなんか、医者でねえとできねえんだけど、船の場合な、この資格を持った人がやった。(つまり、船の中のお医者さんということ)。昭和三十八年に(資格を)取った。当時そんな時に、ちょうど、船は、衛生管理の資格持たねばダメ、船を動かされねえってなってたわけ。(船員が怪我することはよく)あるよ。(網を巻き上げるときに)釣り針がこんなとこ(顔とかに)引っかかってきたりするわけよ。あとは魚に突かれてとか、色々さあ。一瞬の隙もねえから。暇なんか全然ねえから。もう目の休めるときなんかねえんだから。寝る以外は。神経使うんだ。(仮眠は操業中は)一昼夜に四時間か三時間半くらい。二十時間は出っ放しだよ。(航海中は漁場に行くまでの間。操業中は漁をしてる間のこと。)(航海中のときは)麻雀やったり花札やったり。あとはビデオみたり。椅子に座ってばっかだとぼけてしまう。幹部は一人部屋。航海士やなんかは二人部屋。(一人部屋の大きさは三畳くらい)そこにソファがついて、ベッドがついて。机と椅子もあるしと、ビデオやなんやも全部ついてるしと。普通の生活だよ、船(の上は)。板前さん(コック長)が寿司は握ってくれるしな。食べ物なんか最高よ、航海中はな。ただ、(食糧がなくなったときは)

最寄の、近くの色んな港に入るっちゃ。そして、色々肉とか野菜とか油とか仕込んで、また漁場に行って仕事するとき（の食事は）全部一切コック長が管理してる。」

「おら（漁に）行ってたときは、六か月・七か月で帰って来れたわけよ。そのくらい当時は魚獲れたのさ。今は、一年半から二年だよ。そんな時代もあったんだ。六か月くらいで満船にして帰ったのよ。四か月くらいで帰ったときもあんのよ。四十日で満船にしたときもあんのよ。（ルートは）場所によって違うさ。インド洋とかさ、中南米とかさ。（どこの漁場に行くかは）船頭が決める。それを船長が海図によってコースをたてて（船が漁場まで）走っていくと。漁場に向けるのは船長の役目と。地中海とか、インド洋とか、オーストラリアとか、メキシコ沖とか、ハワイ沖とか、ニューヨークとか（色々なとこに行ったんだ）。（港に）入ったときが大変なんださ。出るときと入ったときが。漁場さ行くときは太平洋の真ただ中だの、インドの真ただ中だの走ってっから（船とぶつかることなどはない）。ただ、（船が）混むとこさ行くと、シンガポールのマラッカ海峡なんか、みんな集中するっちゃ。狭いとこさ、そこ通ってくんだから。そんときは大変さ。何かあつときはなんぼ俺が悪くなくても船のことは全部、船長の責任。だから船長で太ってる人ってえのはいないんだよ。みんな痩せ干からびて。神経ば使ってっから。今は GPS（で船の位置を確認した）だべ。おらのときはさ、（分度器を使って、太陽の角度を見ながら）船までの距離とか、今現在どこ走ってるとか、いちいち計算してやったんだよ。」

・船の中での人間関係について

「（狭い船の中で長期間だから）喧嘩はあるさあ。魚来ねえと入港は長くなるべしよ。たばこ切れる酒ねえのってさあ。俺のときは（ほとんど）何にもなかったよ。俺ストレスっての溜まったことないんだよ。全然。ほんなの、だってさあ、一年だの八か月だの六か月だのって航海によ、二十五・六人の人間がさ、毎日朝晩一緒なんだもん。そいつはあのやろおこのやろおってなるっしょ。黙一ってんの。んで何か喧嘩あるときはさ、船長だから来るっちゃ。んでなだめるしさ。（飲まない）酒買ってきたりしてさ。

・船の上で大変だったことについて

- ① コック長が船から落ちたとき
 - ② つり針が顔を裂いたとき
 - ③ あばら骨が折れたとき
- ① 「一番大変だったのはねえ、人を海さ降ろした（人が海に転落した）とき。俺ちようど、夜の夜食過ぎに交代なんで、食事してたのさ、サロンで。したら「よお船長、人海さ降りた」ってんで、「誰やあ」って言ったの。したらコック長ってわけさ。「あれえあいつ泳ぎ分かんねえんだけどな」つって。エンジンストップさせて。んで若えの二人、浮環着けて、水を流すゴムホースを二つに折り返して足かけさせて、海へ飛び込ませて。ん

でみんなデッキ（甲板）に引き上げて。そして落ちたやつはもうクタッてなってるわけだから。イトマキエイの尾っぽ（しっぽ）さ刺されて。毒あるやつ。刺されてよお、血がだらだらだらだら流れるしよ。んで操舵室に運んで、初めて点滴したんだ。縫い貼りは簡単なんだよ。点滴っていうのは今までやったことなかったのさ。（コック長は）顔が真っ青になってさ、何にもどうにもなんなくて。点滴やったらすぐ赤くなってさ。元気になって。（点滴パックは船に積んでいる。）でも血が止まんねえんだよ、毒刺されちまって。エイの鼻っぱしはうんと細いんだよ。それでえぐられっと、傷口はちっちゃいんだけど、中はかなりえぐられてるわけ。そんで肉と皮と別個になんだよ。（毒で）くっつかないから。そこんところ消毒して、リバガーゼを細かく切って入れて、毎日手入れすんのさ。四十日くらいしてもくっつかねえの。そうして（清水の港について）病院さ行って手術さ。

② 「あとは、（船員の）ほっぺに釣り針さ刺さったとき。釣り針つつっても箸くらいの太さだ。（刺さった釣り針で顔が）すっかり錨型にさけてよ。それを縫ったんだ。（傷口を小さく何本も縫うと化膿したときに手入れできないから）最初は大きく（縫って）。ハワイの港さ着いたとき、（ハワイの）医者に「船にこんな風に縫うやつがいるのか」って（驚かれて）。今はもうすっかり治ってるよ。」

③ 「あとはさ、魚槽に誤って落った人がいんのさ。（魚槽に）ぶつかってあばら骨が折れてて。そんでしょうがねえからって、ポリバケツを切って横に穴あけて、中さタオルケット入れて、手ぬぐいで巻いて、あばら骨を固定したんだ。結局一番心配だったのは、あばらが中で折れると内臓が傷つくんだよ。船には何もないから、自分が思った通りにやるわけさ、応急処置だから。んで医者いったらピターッと治ったよ。」

・楽しかったこと／漁師仕事の醍醐味について

「ん～まあ楽しかったってのはねえなあ。魚獲ってなあ、早く満船になったときだよ。（奥さん「かあちゃんからラブレターが行ったとき楽しくないの？（笑）」）あ～かあちゃんからのラブレター？」

「（やりがいは）そりゃあ港入ってさあ、魚の値段が高くてさあ、水揚げ金が多かったときさ。それが一番だな。やっぱり金だな（笑）。あとは何もなくて無事港入ることな。それから（家に）帰ってきて風呂さ入ったときかな。おら一番いいのはさ、何でもかんでも魚いっぱい獲って、魚槽を入れっとこないくらいにして、帰途につくのが最大さ。ああよかったなあって。やりきったなあって。それだけだよ。そして帰る一週間くらい前に水揚げすつからさ、そんで値段が良ければこれに越したことはねえよな、と。」

終章 山と海に囲まれた暮らし

以下は、震災後の唐桑町の小港の景色についての記述である。

「大地震の後、流れ出した重油に引火して大火災に見舞われた気仙沼湾。休漁中の大型漁船が次々に湾の火災で被災した。いつもは大型漁船が停泊するはずのない唐桑の各漁港にはもう漁には出る事のない姿で静かに佇んでいた。その変わり果てた姿に地元漁師たちの切ない思いと立ち止まって微動だにしないその背中は小刻みに震え、刻まれた深いシワの奥には老いた漁師たちが流す涙さえも伺えた。」

東日本大震災で一人一人の生活が「変わり果てた」。そして、社会の風潮も変わった。「絆」という言葉に象徴されるように、昔は当たり前のようにあった「助け合い」の精神を尊ぶことが大切だと強調される。それと同じように、「昔の暮らし」の中に何かユートピアがあると私は考えていた。確かに、都会でずっと暮らしてきた私にとって、唐桑町でのような自然が近くにある暮らしはとても新鮮であった。しかし、そこにも当たり前のようにべったりとした生活感は存在した。人々が自然に対する知恵を身に着け、自然と共に暮らしてきたのは、生きる上でそれが不可欠であったことも大きな要因だったのだろう。だからこそ切実であった。現在を生きる人間が、昔と同じような信仰心を心からもつことや、全く昔のような暮らしをすることは、生活が迫っていない故、とても難しい。それでも、昔の暮らしを知ることや、知恵を伝承していくことは意義のあることである。それは、聞き取りにおいて B さんが言ったことに示される通りだ。

「よくボランティアに来た人達が“ほんとに大変だろうな”って“なんて声かけよう”と思ってみんな心配で来てるわけだよな、ところが、足を踏み入れてみたら、そんなにしょげてるような状況でもない。逆に来て励まされたってよく言うっちゃ。まさに結局、そういう昔のことをまだ頭にある人が健在でいるから、その人達が“これ（震災）に負けないでやってくっぺ”ってなものがあるから、そうなるさな。」

震災直後の状況を一番に受け入れ、閉塞的な絶望状況を引っ張っていったのは、町に住む 80 歳以上の人々であった。彼らは東日本大震災以前にも、津波を二回経験していた。1933 年の昭和三陸地震における津波と、1960 年のチリ地震における津波だ。1933 年のときに家を流されたという人もいた。（このときの被害は死者 1,522 名、行方不明者 1,542 名、負傷者 1 万 2,053 名、家屋全壊 7,009 戸、流出 4885 戸、浸水 4,147 戸、消失 294 戸。）この経験があったからこそ、今回の津波が来てもあまり動揺しなかった。その姿が、震災直後の閉塞した状況に風穴をあけたのは確かであろう。

山を信じ、海を信じ、自然と共に生きた暮らし。それはユートピアでは決してなかった。しかし、何世紀にかけて育まれてきたその暮らしの中にこそ、「戻りたい未来」があるのではないか。それは、「仕方がない」という前を向いた歩き方ができる未来であると思う。そして、その感覚は「自然」と共に暮らすことで取り戻されると期待している。都会には人が作ったものしかないため、都会の人間の典型的な特徴として「人のせいにする」とい

うものがあるらしい。何か問題が起きたときに追及すると全て人のせいにする。しかし、これが自然が相手であったら「仕方がない」と考えるしかない。そこには、「仕方がない」という余裕が生まれる。だからといって、自然は放置していればいいというものでもない。第二章の聞き取りでもあったように、若布やウニ・帆立にしても自然のものは人が採らないとバランスがくずれる。つまり、「手入れ」も大切なのだ。

「仕方がない」という許容の感覚と「手入れ」をすること。山と海と共に暮らす生活そのもの、そしてそこから学べるこの二つの知恵は、どんなに表面的な生活が「便利」になろうとも、忘れてはならない。

参考資料：東日本大震災における唐桑地域内の被害及び復旧状況について

◆「東北地方太平洋沖地震」概要

- ・発生日時：平成23年3月11日（金） 午後2時46分頃
- ・震源の緯度、経度、深さ：北緯 38° 06.2′ 東経 142° 51.6′ 24 km
- ・規模（マグニチュード）：9.0
- ・各地の震度（気象庁発表）

[唐桑町] 6弱（5.5）※総合支所内地震計

[赤岩] 6弱

[笹が陣] 5強

[本吉町] 5強

◆「東日本大震災」被害概況

- ・人的被害（平成24年7月27日現在判明分まで）

気仙沼市内における死者数 1,038人（うち身元不明遺体 31人）

気仙沼市内における行方不明者数 268人

合計 1,306人

※死者は気仙沼警察署検死者数、行方不明者は同署への届出者数

- ・被災世帯数 約9,500世帯（35,7%）

※推計。（）は世帯数（26,601世帯 H23.2月末）に対する割合

■唐桑地域被害状況等

1. 死者数 103人（平成24年7月31日現在）

2. 行方不明者 2人（ ）

3. 家屋被害状況（平成24年3月31日現在 市税務課調べ）（単位：棟）

地区名	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	計	地域の棟数に占める被害の割合

中井	212	9	21	171	413	17.5%
唐桑	994	56	76	202	1,328	37.0%
小原木	664	26	15	86	791	49.3%
合計	1,870	91	112	459	2,532	33.5%

※全棟数 中井地区 2,356 棟

唐桑地区 3,594 棟

小原木地区 1,604 棟

合計 7,554 棟

4. 住家被害状況（3. の内、住家分を再掲）

（単位：棟）

地区名	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	計	地域の棟数に占める被害の割合
中井	87	6	18	154	265	21.7%
唐桑	439	26	44	172	681	39.2%
小原木	307	10	10	77	404	53.9%
合計	833	42	72	403	1,350	36.4%

※全棟数 中井地区 1,220 棟

唐桑地区 1,739 棟

小原木地区 750 棟

合計 3,709 棟

5. 津波による被災世帯数・世帯人員（平成 24 年 3 月 31 日現在 総務企画課調べ）

地区名	被災世帯数	被災世帯人員
崎浜	1 2	3 7
松圃	1	4
中井	1	1
小鯖	5 2	1 6 7
中	1	2
鮎立	1 2 3	4 0 3
舞根	9 0	3 1 0
宿	7 4	1 9 5

石浜	21	71
只越	44	139
館	14	42
大沢	139	474
合計	572	1,845

○被災世帯割合 23.9% ○被災世帯人員割合 24.3%

- ・被災世帯数は、平成23年度分固定資産税課税免除区域の地番と平成23年1月31日現在の世帯住所を突合して算出したもの。
- ・被災割合算出の総世帯数は、2,389世帯、総人口は7,598人（平成23年2月28日現在）

6. 避難所の状況

平成23年9月27日までで、地域内すべての避難所解消

〔閉鎖した避難所〕 19施設

松園幼稚園 (3/14)	中井老人憩の家 (3/17)	中井小学校 (3/20)
第2高松園 (3/20)	越路集会所 (3/24)	唐桑中学校 (4/5)
はやま館 (4/10)	土筆の里 (4/10)	館老人憩の家 (4/17)
鮪立児童館 (4/19)	崎浜集会所 (5/16)	第一高松園 (7/14)
唐桑公民館 (7/14)	第2体育館 (7/15)	中井公民館 (7/17)
唐桑小学校 (7/18)	燦さん館 (7/18)	鮪立老人憩の家 (7/19)
小原木中学校 (8/7)		

〔閉鎖した2次避難所〕 3施設

民宿美鈴荘 (7/1) からくわ荘 (9/20) ユースホステル (9/27)

7. ライフラインの状況

- ・電気 全域で通電（ただし、津波被災地区の一部を除く）
- ・上水道 全域で通水（ただし、津波被災地区の一部を除く）
- ・下水道 大沢地区農業集落排水処理施設 処理機能停止・一部管渠破断
1次処理（沈殿・塩素減菌）後、上澄みは放流。沈殿物は気仙沼し尿処理場へ搬出。
- ・固定電話 津波浸水地域の一部を除き通話可能
- ・携帯電話 全域で通話可能
- ・道路 国道・県道・基幹市道は通行可（一部枝線で通行止め箇所あり。）
地域内市道23路線、28箇所路面欠損・亀裂・沈下等

（平成23年3月24日調査時点）

通行止め：石浜3号線の一部、港の前草畑線の一部（大沢地区）

※中井小学校扇沢線復旧（平成 23 年 11 月 21 日）

※石浜 1 号線片側交互通行で開通（平成 23 年 12 月 22 日）

8. 仮設住宅の入居状況（平成 24 年 10 月 22 日現在）

旧唐桑小学校跡地	: 84 戸	70 世帯・207 人	(空き室 2 室)
小原木小学校校庭	: 30 戸	20 世帯・76 人	(空き室 2 室)
福祉の里 A	: 35 戸	33 世帯・121 人	
福祉の里 B	: 45 戸	43 世帯・97 人	(空き室 1 室)
福祉の里 C	: 19 戸	18 世帯・39 人	(空き室 1 室)
漁火パーク	: 21 戸	18 世帯・45 人	(空き室 1 室)
中井小学校校庭	: 20 戸	16 世帯・45 人	(空き室 2 室)
小原木中学校校庭	: 57 戸	51 世帯・139 人	(空き室 4 室)
計	311 戸	269 世帯・769 人	(空き室 13 室)

引用文献

『山に暮らす 海に生きる』結城登美雄、1998 年 10 月 30 日、無明舎出版

『森は海の恋人』畠山重篤、1994 年 10 月 25 日、(株) 北斗出版

『風土』和辻哲郎、1979 年 5 月 16 日、岩波書店

『漁民の世界—「海洋性」で見る日本』野地恒有、2008 年 5 月 10 日、講談社

『半島地域漁業の社会経済構造』小林恒夫、2004 年 11 月 5 日、(財) 九州大学出版会

『東北の山岳信仰』岩崎敏夫、1984 年 4 月 20 日、岩崎美術社

『街の情報誌 「浜らいん」 東日本大震災特別号』、2011 年 5 月 31 日、「浜らいん」編集室

<http://www.rias.miyagi-fsci.or.jp/kk/mind/goten.html> (唐桑御殿) 2012 年 10 月 28 日閲覧

<http://www.ringyou.net/midoripress/vol13/special.html> (室根・植林活動) 2012 年 11 月 20 日閲覧

<http://www.bo-sai.co.jp/tunami.htm> (津波の知識と教訓) 2012 年 5 月 19 日閲覧

参考文献

『黒坂愛衣のとちぎ発<部落と人権>のエスノグラフィ Part1』黒坂愛衣+福岡安則、2003 年 12 月 10 日、創土社

『復興コミュニティ論入門[シリーズ災害と社会第 2 巻]』

『オオカミの護符』小倉美恵子、2011 年 12 月 15 日、新潮社

『漁師はなぜ、海を向いて住むのか?—漁師・集住・海廊』地井昭夫、2012 年 6 月 26 日、工作舎

『日本の漁師』塩野米松、2009 年 11 月 10 日、筑摩書房

- 『山に生きる人びと』 宮本常一、2011年11月20日、河出書房新社
- 『3.11 東日本大震災 巨震激流』、2011年7月23日、三陸新報社
- 『緊急出版 特別報道写真集 巨大津波が襲った 3・11大震災～発生から10日間の記録～』、2011年4月8日、河北新報社
- 『緊急復刊アサヒグラフ 東北関東大震災全記録』、2011年3月30日、週刊朝日
- 『虫眼とアニ眼』 養老孟司・宮崎駿、2008年11月15日、新潮社